



大学と社会の齟齬そごを考える

Makoto FUJITA **藤田 誠** 東京大学大学院工学系研究科



「先生、良くそんなことを思いつきましたね。」

マスコミの取材を受けた際、我々の研究の着想や成果を一通り説明し、和やかに対談を終えたところで、記者がそう感想を述べてくれた。お褒めの言葉であることは理解できたが、同時に何か違和感を覚えた。「だって、思いつくことが僕らの職業なんですよ」と心の中でつぶやきつつ、その場はただ笑みを返して通りすぎた。今にして思えば、研究の本質とは、人と違うことを発想し実現することだという大前提の事柄が、記者には十分に理解されていなかったようであった。

違和感

似たような違和感は、国連が定めた持続可能な開発目標（いわゆるSDGs目標）が、研究者が取り組むべき研究課題として、研究の現場に瞬時に降りて来た際¹⁾にも感じた。SDGsは世界中の全人類が共通に認識して取り組むべき素晴らしい統一目標であるが、同時に世界中の誰もがうなずく、いわば最大公約数的な理念である。この「最大公約数の理念」と「人と違った発想」がどうしても馴染まない。

近年強まった研究費配分におけるトップダウン課題設定の傾向も然りである。トップダウンそのものを否定するつもりはなく、むしろ研究者が気がつかなかった、新しい発想が提供されるのであれば大歓迎である。しかし、通常は、最大公約数の理念にとらわれたものや、二番煎じの勧めと思えるほど、世界の研究の動向調査から絞り込まれたものが多い。本誌でも議論された「科学のポピュリズム化²⁾」に通ずる違和感がある。

筆者の違和感は、本誌への矢野寿彦氏（日本経済新聞）の寄稿「科学者は社会にも目を向けよう」³⁾を一読してさらに強まった。矢野氏は日本の科学技術を長年にわたり取材し、日経新聞の社説もしばしば担当される識者であり、その識者の目に映る大学の姿は、社会の目に映る大学の姿そのものと言って過言ではない。同氏の論説を、社会から見た大学のありのままの姿と

して真摯に受け止めた。ただ、そこに描かれている研究者像は、社会には目を向けず個人の知的好奇心を追求し蛸壺に閉じこもる、昭和の時代に問題となった閉鎖的な研究者の姿であった。少なくとも筆者の周囲を見渡す限り、該当する研究者はまず見当たらない。

大学と社会の齟齬

研究者が社会に目を背けているなどということは、断じてない。世界がコロナ禍に見舞われる中、一般人はもちろん、いかに優秀な指導者といえども、結局は明治時代と同じ対策しか取りようがない。この状況を打開できるのは科学の力しかなく、多くの研究者は、自分の研究が何か役に立たないかと、居ても立っても居られない気持ちになった。エネルギー、環境、あるいは災害時復興の問題に直面したときも同じである。

ただ、これらの問題はあまりに難題すぎて、一朝一夕には、まして既存の考え方の延長では解決策が生まれそうにない。活路が見いだされるとしたら、その起点には今までにない新しい発見や新しい発想が必要である。多くの研究者の心底にはそのような意識が根付いており、だから人と違った発想を求める。歴史をたどっても、イノベーションの起点には必ず人と違った発想があった。これだけイノベーションが叫ばれながら、その本質が理解されず、研究者の姿勢が知的好奇心の追求と映るのは大変残念な思いである。

違和感の正体が、大学と社会の間に生まれた齟齬であることが段々と見えてきた。それにしても、どうしてこんな齟齬が生じてしまったのだろう。

大学の歴史を振り返る

歴史を振り返ってみよう。明治時代の帝国大学設立時には、国の繁栄のためには政治と学問を切り離すべきという「学の独立」を時の総理大臣が唱え、その精神は憲法にまで盛り込まれた。残念なことに大学はその意味を履き違え、運営を含めたすべての独立を目指

した。昭和の時代、大学は徐々に特別自治区と化し、ついには社会の法律（労働基準法、消防法、安全衛生管理基準など）さえも適用されない治外法権を獲得してしまっただ。学の独立を守るべき大学が、皮肉なことに「学の孤立」をつくり出してしまった。

平成の時代に入り、当然のごとく大学には社会からの大きな非難が集中した。法人化、研究費の競争的配分、人員削減、運営費削減、評価・任期制の導入等、その運営に大きなメスが入れられた。ところが、学の孤立に対する反動はあまりに大きすぎ、大学はしばしば社会から過度の制裁とも言える処遇を受けた。研究者の地位は失墜し、社会から研究者へのリスペクトも一気に消滅した。正すべきは組織運営であったにもかかわらず、ついには守るべき学の独立を含め、すべてが否定され始めた。つまり、今度は社会全体に論点の履き違えが起こってしまった。

平成の後半には、いよいよ研究者の疲弊が始まり、日本の科学技術力は低下の一途をたどった。教育現場では、若者が次第に研究者を目指さなくなった。結局、大学と社会の齟齬は、大学の失活という大きな社会の損失をもたらした。

齟齬の解消

楽観的に見れば、10年もしないうちに今度は逆方向の反動が働きそうである。しかし、時計がこれだけ早く進む現代社会において、10年20年のロスはあまりに大きい。また、一度失われた大学の機能は復活に半世紀を要する。これは隣国の歴史から学ぶべきだ。そうなる前に現状を打開したいが、さすがに政治にまで働きかけての改革は時間がかかる。考えた末に筆者がたどり着いた1つの案は、大学と社会が対話を重ね、少しずつ齟齬を解消していくことである。ある程度の即効性は期待でき、学会をあげての活動はもちろん、個人の努力の積み重ねでも効果がありそうだ。

サイエンス・コミュニケーション

大学と社会の対話の一助となるサイエンス・コミュニケーションの場が昔と比べ格段に増えた⁴⁾。新聞の科学欄やテレビのサイエンス番組など、質の高いものが多く見受けられる。大学教員も、公開行事、市民講座、出張講義などの機会が随分と増えた。

ただこのような場で、研究の本質を伝えることは本当に難しい。専門的な内容が難しすぎるという話ではなく、根本において研究は創作活動であり、その活動が未来の明るい社会につながるという仕組みが、社会

には伝わりにくい。社会にわかりやすくサイエンスロマンを語れば、社会と隔絶した研究者のイメージがますます膨らんでしまう。サイエンス・コミュニケーションは伝え方を間違えると、大学と社会の齟齬を拡大しかねない。研究の本質や、社会に向き合う研究者の姿勢を正しく社会に伝えることの難しさを認識した。

鍵を握るマスコミとの対話

大学と社会のインターフェースとして、なんといっても大きな役割を果たしているのは、マスコミである。そのマスコミに、社会と隔絶したかつての大学の残像が根付く限り、齟齬は永遠に解消しない。マスコミに理解を求め、協力を願うことが1つの鍵を握りそうだ。化学会を通してのマスコミとの対話が、今後は積極的に行われることを期待する。

おわりに

大学が本来あるべき姿を取り戻すには、もちろん大学のさらなる努力が必要で、大学自らも改革の声を盛んに上げている⁵⁾。ただ、その多大な努力も、齟齬から生まれる誤った認識やイメージを当てはめられては、すべてが水の泡である。一度定着したイメージは並大抵の努力では拭い去れない。しかし、元はと言えば昭和の時代に大学がつくり出した社会との齟齬である。それをそのまま次世代に持ち越すわけにはいかない。その解消に努め、願わくば、かつての研究者の地位と社会からのリスペクトを取り戻すことは、筆者らの世代の責任とも言える。

話が明治時代までさかのぼるなど、発散しすぎて、偏見にも満ちた論説となってしまった。疑問視する声も聞こえてきそうだが、承知の上である。そもそも万人受けの論説を寄稿するつもりはなかった。ほんのひと握りで良い、今度はそう言われたらと思い執筆した一先生、良くそんなことを思いつきましたね、と。

- 1) a) 有本建男, 化学と工業 **2017**, 70, 7; b) 浦田尚男, 化学と工業 **2018**, 71, 99; c) 有本建男, 化学と工業 **2018**, 71, 923.
- 2) a) 山本 尚, 化学と工業 **2019**, 72, 657; b) 御園生誠, 化学と工業 **2019**, 72, 935; c) 有本建男, 化学と工業 **2020**, 73, 835.
- 3) 矢野寿彦, 化学と工業 **2021**, 74, 79.
- 4) 佐藤健太郎, 化学と工業 **2021**, 74, 265.
- 5) 山本 尚, 化学と工業 **2019**, 72, 5.

© 2021 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会の委員の執筆によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetu@chemistry.or.jp